

## 研究発表もうしこみフォーム

氏名：西村 僚之佑

氏名のローマ字表記：Ryonosuke Nishimura

所属：大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士後期課程 1 年

専門分野：モンゴル語学

発表のタイトル：モンゴル語の格語尾における時間空間概念表示の意味役割に関する考察  
発表要旨（600 字～800 字程度）：

モンゴル語の格語尾造格と与位格における時間・空間概念表示の意味役割に関して通時的及び共時的に着目していく。

現代モンゴル語において造格には、空間の広がりと時間の広がりという意味役割が存在し、与位格には、点としての空間と点としての時間の意味役割が存在している。これにより、現代モンゴル語の造格と与位格の間には、広がりと点という対比が存在していることがわかる。

中世モンゴル語に関しては、元朝秘史を参照し、造格は時間の広がりという意味役割と思われる箇所が 1 箇所のみ存在しており、それに対し空間の広がりという意味役割は  $\text{-bar}^2$ 、 $\text{-iyar}^2$  の形に絞っても 26 箇所存在している。そこから、中世モンゴル語では造格は積極的に時間の広がりという意味役割として用いられていなかったと予測される。与位格に関しては、点としての時間の意味役割が 174 箇所、時間の意味役割が 19 箇所存在していた。但し、時間の意味役割の中には、点としての時間ではなく時間の広がりとしての意味役割と思われる箇所が存在していた。以下の 78 節がその例である。

78 節 borohan-**dur** šiqaqu čino metü...

風雪の時に忍び寄る狼のように...

上記で用いられている **-dur** は現代モンゴル語の  $\text{борооноор}^1$  と同様の意味役割のように思われる。このことから中世モンゴル語において与位格は時間全般を表していたのではないかと推測する。

以上から、モンゴル語の造格と与位格は、中世では時間全般は与位格が表し、空間に関し広がりという対比だったものが、現代語では造格において空間の広がりという意味役割が時間に意味拡張を起こし、時間の広がりという意味役割を持つようになり、結果として現代モンゴル語においては、造格と与位格の間に広がりという対比が存在するようになったと思われる。また、方言圏論により、甘肅・青海省出身のモンゴル人が時間の広がりを与位格で表す方言を用いていることから、この可能性の高さを伺うことができる。

---

<sup>1</sup> Усан борооноор би ганц хүнийг боддог.

(雨の中、一人の人を思います。)